

久留米芸能祭にL.メンバー3名出演!!

りんどう
L.C通信
かわら版
平成14年
11月8日
第5号
PR委員会発行

初めての歌舞伎体験

L.泉 元

地域文化の充実と向上に貢献するとの目的で今年33回目の市民芸能祭が10月27日(日曜日)久留米市民会館にて開催され、協役とし初参加をさせて頂きました。7月27日より日本の打ち合わせが始まり、練習、訓練3ヶ月、10月26日(土曜日)リハーサル、豪華絢爛大名衣装を着させて頂き、(昔の人は、どげんして小便ばしよったじやろうか?の思い。)

当日は、カツラ、真っ白い化粧と初めてづくし。いよいよ本番、多少の緊張あり、ライトが熱い。なんとか台詞が出て、午前の部が終り、楽屋に戻ると、「小歓迎」(主役(柴田L)は「大歓迎」)。午後の部では眠たい目を懸命に開けて終了。あくほっとした。(疲れたけど、何となく充実感。)

日本伝統文化(芸能の世界にふれ、江戸時代(日本人の優雅で情緒的一面が認識させられた。来年は、我がりんどうライオンズクラブよりもっと多数の出演者が出たら楽しいだろう。)

L.柴田、L.松尾お疲れ様でした。

緊張の市民芸能祭を終えて

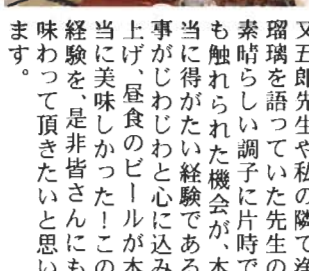
L.松尾 拓也

人間、緊張することは良い事だと思いません。しかし学生時代ならばいざ知らず、この年代に成ると緊張する機会も滅多にある事では有りません。

今、私達の歌舞伎の幕は開き、観客の視線は舞台に注がれる。私の掌には汗が滲み沸き、折角の舞台化粧の大名顔も冷や汗で取れかかっているのではと思う程。L.柴田は如何にも慣れ舞台であるかの様に、威風堂々と構えて、台詞も板に付いている。夏場前より、何度も練習した短い台詞が私の前に回ってきた。心臓は高鳴り、口から飛び出してしまうような状況、緊張も最高潮の境地に入り、何が何やら全く覚えていない有り様。気が付くとL.柴田が見事に手水の石を切り、約70分の舞台は終わっていた。L.泉が満面の笑顔をもって「お疲れ」との一言で、やっと我に返った。心地よい汗と共に、爽快な気持ちに包まれた。と、苦きたいが、まだまだそのような境地ではなく一杯で終わって頂けた感想ですが指導をして頂いた、人間国宝の中村又五郎先生や私の隣で浄瑠璃を語っていた先生の素晴らしい調子に片時も触れられなかった機会が、本当に得たい経験である事がじわじわと心に込み上げ、昼食のビールが本当に美味しかった!この経験を、是非皆さんにも味わって頂きたいと思います。



10月27日(日)久留米市民会館にて、「第33回久留米市民芸能祭」が開催されました。毎年、柴田がこれに出演していますが、今回はそれに加わり、何とL.泉・L.松尾が「梶原平三置石切(かじわらへいぞう)ほまれのいきり」に初出演しました。泉氏、松尾氏よりコメントを頂いたので御紹介致します。



◆唐突ではありますが、久留米の歴史を再認識!◆ 久留米藩の成立

久留米藩有馬氏 藩主在封年数一覧

藩主名	藩主在封年	在封年数
1 豊氏(とようじ)	元禄6年(1620)~寛永19年(1642)	22年
2 忠頼(ただより)	寛永19年(1642)~承応4年(1655)	13年
3 頼利(よりとし)	明暦元年(1655)~寛文8年(1668)	13年
4 頼元(よりもと)	寛文8年(1668)~宝永3年(1705)	43年
5 頼貴(よりむね)	宝永2年(1705)~宝永3年(1706)	1年
6 頼繼(のりみさ)	宝永3年(1706)~享保14年(1729)	23年
7 頼徳(よりゆき)	享保14年(1729)~天明3年(1783)	54年
8 頼貴(よりたか)	天明4年(1784)~文化9年(1812)	28年
9 頼徳(よりのり)	文化9年(1812)~弘化元年(1844)	32年
10 頼永(よりのち)	弘化元年(1844)~弘化3年(1846)	2年
11 頼成(よりのけ)	弘化3年(1846)~明治4年(1871)	25年

【藩の居城】

所在地 久留米城(筑山山頂)
所在地 久留米城(筑山山頂)
所在地 久留米城(筑山山頂)

久留米藩主有馬氏の遠祖は播磨の守護赤松則祐で、その子義祐が播磨国有馬郡を領して有馬姓を名乗った。その七代の孫が則頼である。則頼は播磨国三木に生まれ、それが所領を失い不遇の身であったが、秀吉に招かれ毛利攻めの功により淡河三〇〇石を受領し、のち、万五〇〇石に加増となる。

その後、関ヶ原の役において家康に尽くした功により摂津国有馬郡二万石を拝領した。

初代久留米藩主有馬豊氏は則頼の子として、永禄十二年(一五六二)に誕生した。

豊氏は秀吉に仕え三〇〇石を知行し、文禄四年(一五九五)には遠江国横須賀三万石を受領した。

関ヶ原の役では豊氏は父則頼とともに家康に味方した功により、遠江国横須賀より、丹波国(京都府) 福知山八万石へ転封した。

投稿詩選

皆様から御寄せ頂いた詩句、俳句などを不定期にお届けする、新コーナーです。「そこそこ」という方は、ぜひこの機会に御投稿下さい。

今回夫、高松の奥様、喜久子夫人よりいただいた詩を御紹介致します。

コスモス園にて
高松 喜久子
休耕田を埋めつくし咲くコスモスの彩それぞれに
きはだちて見ゆ
コスモスを写さんと来し友らみなひたすら夕日と
花に对きあふ
大低く育てられたるコスモスの広野をすぐる
風の香なし



【有馬家家紋】

犬声独語

秋は日々閑けゆく。私みたいなヤツでも感傷的な気がする。笑わぬいでおく。▼
葉にしみとほる牧水が「白玉の秋の夜の酒はしづかにのむべかりけれ」と詠むといふ歌うと何ぞかしら日本酒でないといけなくなる。歌の文句ではないが、「酒は温いのがいい」、それじや肴は何がいい、それじや肴はまってる、だろ「秋刀魚」だ大根おろしに青いキズ。

▼今夜例会の帰りに日本酒とサンマでいっちょよう行こうか。これだつたら文句はあれだ。日本人に生まれて良かった。▼あはれかぜよ情あらば伝へてよ男ありて今日の夕餉にひとりさんまを食いて思いにふける。誰だつたか忘れたが有名な詞だ。▼しかし、飲兵衛の同輩や先輩、酒はしづかに飲むべかりとかひとりさんまを食うとか、イヤに温っぽい秋の酒じやござんせんか、わたしやそんな酒なら飲まない方がいい。春夏秋冬酒は大勢でパァーと陽気に飲んだ方がいい。一人飲んだ酒は酔わない。▼この不景気なご時世に不謹慎きわまりないことでもスミマセン。でも、こうでもしなけりや憂さを晴らすことができない。エライ時代になったもんだ。